追悼エッセイ

伊藤和行さんの思い出

伊藤 憲二*

Reminiscence

Kenji ITO

私にとって伊藤和行さんはまず東京大学科学史・科学哲学の 10 年ほど上の先輩です。私が東大の理科一類から東大の教養学科科学史および科学哲学分科に進学したのが 1986 年のことでした。そのころはすでに伊藤和行さんは大学院生ではなく、ご留学中だったと思いますが、「ガリレオ三兄弟」の一人（そのうちの一人はこの特集にも寄稿していただいている斎藤憲さん）として、先生方や先輩方からよくお名前を聞いていました。当時の駒場の科哲には、伊東俊太郎先生がおり、さらに伊藤和行さん、「ガリレオ 3 兄弟」の「妹」とされる伊藤しゅうさん、さらに私が入ったので、「いとう」だけではわからない、ということで「伊藤和行さん」とフルネームか、あるいは単に「和行さん」とお呼びする人が多かったと思います。

私が大学院生の頃には、東大駒場キャンパスの 14 号館 3 階にある科学史科学哲学の事務室にいらして、斎藤憲さんと一緒におられるのをよくお見掛けしたと記憶しています。当時、物理学史の研究を志していたので、北大物理の出身でおられたことは意識していました。それ以上に印象深かったのは、コンピュータについてのご造詣が深いことでした。斎藤憲さんと伊藤和行さんに、当時、研究者に使われだしたパソコンについていろいろと教わったことを思い出します。紙に印刷された文章をコンピュータに打ち込もうとしていたら、「そのぐらいの印刷の質なら、OCR で行けるのでは」みたいなことを言われたことを覚えています。東大科哲というところは、なかなか近寄りがたい、怖い先輩方が多いのですが、伊藤和行さんはその中で例外的に気軽にお話しできる方の一人でした。

京大に着任されたことをお聞きしたのは、私が留学する直前だったと思います。私が 2002 年に留学から帰ってからは、京都と東京（後に神奈川）と離れていたこともあって、ほとんどお会いすることもありませんでした。専門外のこととはいえ、マリオ・ビアジョリのもとでガリレオのこともすこしかじってきたので、帰国直後に一度、

* 京都大学文学研究科

お話しできていたらよかったのかもしれないのですが、機会を得られませんでした。

しかし、2008 年から 2010 年まで、私も研究分担者として加わらせていただいた「湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」という科研費のプロジェクトでは、連携研究者として京大におけるプロジェクトのキーパーソンになっていただきました。この科研費プロジェクトは日本の物理学史の資料整理を主眼とし、とくに京大に眠っていた膨大な湯川資料が非常に大きな位置を占めていました。本来のご専門とは違う内容でご負担をおかけしたのではないかと危惧していましたが、もともと非常に幅広い教育や研究指導を担当されていたことを後に知り、普段やられていることと比べてそれほど毛色の違うことではなかったのかもしれないと、やや胸をなでおろしています。

2022 年の 10 月にもとおられた研究室を引き継ぎ、伊藤和行さんは私にとって単なる先輩以上の人になりました。残された書籍や書類を調べ、使っておられた椅子と机を使って仕事をしつつ、伊藤和行さんの存在が改めて強く感じられました。歴史がなんであるかについては、歴史家の数だけ違う考えがあるでしょう。しかし、少なくとも歴史の一つの役割は、今は亡き人たちの思いや、行いや、残していった物、やり残していった事柄をいくぶんかでも引き継ぎ、後世に伝えていくことだろうと思います。当然ながら、伊藤和行さんがやっていたであろうことと私のこれからやることは同じではありえないのですが、それでも伊藤和行さんが何を目指しておられたのかは常に意識し、考え続けていくでしょう。やり方は違うとしても、見ておられたその遠い先は、おそらく私とそれほど違わないのではないかと考えています。京都大学の科学哲学科学史専修は日本国内外から学部生・院生が集まる極めて重要な場所ですが、ここでの科学史の研究と教育は多くの方々の協力なしにできることではありません。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。